

# サルにかかわる大問題

## Monkey business

人間の世界で起きる児童虐待に関して、霊長類研究ははたして何かの役に立つのだろうか。本コラムでは、*Nature* のオンラインニュース担当記者 Michael Hopkin が霊長類研究をめぐる問題を考えた。

doi:10.1038/news050627-11/30 June 2005  
Michael Hopkin

類人猿などのサル、ヒトの間である霊長類は、時に人類自身の姿を知るための手がかりを映しだす鏡となる。配偶行動や種族組織、それに家族生活という場でサルがどのような行動をとるか。こういった研究から得られることは多い。しかし、だからといってその種の研究を突き詰めるために、サルに苦痛を強いる必要は断じてない。

最近 *Proceedings of the National Academy of Sciences* に発表された研究<sup>1</sup> はアカゲザルの児童虐待に光を当てたものだったが、その裏の目的は人間の児童虐待の解決にある。こうした虐待は、アカゲザルでも人間でも自然に発生している。アカゲザルの子の5～10%は、程度の差はあれ、かむ、押しつぶす、投げ飛ばすなどの身体的攻撃を母親から受けている。

人間でもアカゲザルでも、児童虐待は次の世代に受け継がれるという性質がある。虐待をする人間のおよそ70%は、自身も子どものときに同じ目にあっていたと推定されている。このことから生物学者は、こうした傾向は経験によるのか、あるいは遺伝子によるのかという問題を考えるようになった。つまり、子を虐待するという行為は、後天的に獲得されたものなのか先天的なものなのか、という問題だ。

この疑問を解明しようと、シカゴ大学の生物学者 Dario Maestriperi はヤーキーズ国立霊長類研究センター（米国ジョージア州ローレンスビル）でアカゲザルの研究を行った。Maestriperi は、虐待をする実母をもつ子ザルと虐待をしない実母をもつ子ザルを複数、それぞれ母親から引き離し、別の雌ザルに育てさせた。ここで養母に選ばれた雌ザルには、過去に虐待をしたことがあるものも、そうでないものもいた。

別の子ザルは実の母親のところにとどめたが、ここでも虐待をする母ザルとしない母ザルを用いた。こうしてあらゆる組み合わせを網羅することで、子に対して優しく接するかどうかは遺伝的素因によるものなのか、経験によるものなのかを調べられた。

### 母の愛

その結果、虐待をする母ザルに育てられた子ザル16匹のうち9匹は、自らの子を虐待するサルに育った。虐待をしない母ザルに育てられた子ザルは、親になっても虐待をしなかった。唯一結果を左右したのは、どのように育てられたかということだった。実の母親が虐待をするかどうかは、まったく結果に影響しなかった。

小規模ではあるがこの試験は、子への虐待傾向が遺伝子ではなく幼時の経験によって形成されることを意味している。そのまますぐに人間の家族に当てはめられがちな結論だ。

しかし、人間の挙動に関する疑問を解明するのにサルを用いるのが、最適な方法なのだろうか。さらに、こうした知見（実験結果）があれば、人間社会における児童虐待を解決できるのだろうか。私はいずれもそうは思わない。

この研究の意図そのものは称賛されてよいものだろう。だが、いくら虐待が自然に発生するものとはいえ、苦痛を与える可能性がきわめて高い雌ザルのもとに子ザルを置くのは間接的な残虐行為だといってもよいと思う。ヤーキーズの施設は国際実験動物管理認定協会の完全認定を受けており、この分野の専門家の目には、実験が倫理的に適切だと映っている。しかし、その考えには賛同しかねる。

### 適切な方法か？

人間での虐待の問題を解明する方法はほかにある。虐待が後天的なものか先天的なものかという問題は、実際に虐待を予防するうえでは役に立たない。それよりも、しかるべき社会的ケアのネットワークを確立しておくことのほうがはるかに重要である。また、仮にそうした問題が重要性をもっているとしても、研究材料としては養育施設がもつ大量のデータにまず目を向けるべきではないか。

米国はこれまで、常に実験的霊長類研究の拠点となってきた。欧州をはじめとして多くの国では、この種の研究の承認はなかなか得られない。研究用動物に関する倫理は、研究で得ることが期待される知識に対し、与える苦痛が正当化可能なものであるかどうかを基本とするべきである。

実験的研究では苦痛が避けられない場合が多く、それは人間の場合でも同じだ。しかし、動物の子から親による養育を意図的に奪う研究には心の痛みを覚える。1960年代には、とがった細長い金属でできた作り物の母親のもとに子ザルを置き、やすらぎを求めて冷たいかたまりに寄り添おうとする子ザルを観察する研究が行われた。子が親の愛を追求することを求めるための霊長類研究など必要だったのだろうか。

あらゆる動物にはさまざまな知覚力があり、科学研究のために動物を使用する場合は、その倫理性が考慮されるべきである。感情的な苦痛を真に感じる能力をもつ霊長類の場合、今回のような科学的介入はとくに最小限にとどめるべきと考える。 ■

1. Maestriperi D. *Proc. Natl. Acad. Sci. USA*, **102**, 9726-9729 (2005)